

# 世間解

第四十九号

令和五(二〇二三)年一月

発行 西法寺

## 念仏もうさるべし

―お念仏の日暮らし―

新しい年を迎えました。コロナ禍からは丸三年、まだまだ落ち着かない日が続きますが、何はともあれ一区切りであります。

今年もご本願のおはたらきの中「なんまんだぶ、なんまんだぶ」とお念仏ご相続させていただきお念仏さまと皆さまにお育てをいただくことであります。何卒宜しくお願い申し上げます。

ことは親鸞聖人(宗祖・ご開山)のご誕生八百五十年の年にあたります。宗祖は平安時代の終わり、源平の争乱が勃発する直前、承安三(一一七三)年に京都の日野の里でお生まれになりました。二十九歳で法然聖人のお弟子となられ九十歳でご往生になられるまで、法然聖人から聞き承けられた選択本願念仏という阿弥陀さまの本願力によるお念仏の日暮らしの真实性を確認し続け伝え続けてくださったお方でありました。

また今年には宗祖ご誕生八百五十年と共に、立教開宗八百年の年にもあたります。立教開宗とは浄土真宗が開かれてということですが、本願寺ではそれを親鸞聖人の主著であり、浄土真宗の根本聖典(ご本典とも申しあげます)である『顕浄土真実教行証文類』(学校の教科書では『教行信証』といわれることが多いですが)の完成の年としています。その年を親鸞聖人五十二歳の元仁元(一一二四)年と定めて、以来八百年という記念の年ということになります。ご本典を書かれ浄土真宗を開かれる基を築いてくださったので、親鸞聖人のことをご開山ともお呼びするのであります。

さて、この元仁元年という年にはもう一つの意味があります。この年は、恩師・法然聖人の十三回忌の年であると同時に、またしても京都では法然聖人の専修念仏の教えが弾圧を受けた年でもありました。ご往生になって十三回忌を

迎えてもまだ弾圧を受けねばならない程に現実的には当時の仏教界からは認められなかった教えであったといえるでしょう。

しかし、これは決して間違った教えというわけではありません。

在家の日暮らしと出家の仏道とはまったく違う、出家をし特別な行を積むことが出来なければ覚りを開くことなど出来ない。在家では仏道を歩むことなど出来ない

と考えられていた当時の仏教の考え方は別に「在家にあっても間違いのない仏道を歩む事が出来る。」いや、在家も出家も問題ではなく阿弥陀仏の本願

念仏によって救われてゆくという日暮らしを送ることこそ真実の仏道である」と、自力修行の徳と引きかえに悟りに近づいてゆくというそれまでの仏教からは決して出てこない、阿弥陀さまがこの私を抱き取って育て、覚りの身としてくださる

という阿弥陀仏の大悲の救いが理解されていないからであります。その法然聖人の教えの真实性をどうしても立証し、後世に伝えておかなければ

ならない、そのために親鸞聖人がどうしても『ご本典』を書かねばならないと思いたれたのがこの元仁元年であったとも考えられています。

それまでの、民衆の日暮らしとは隔絶していた国家仏教とはまったく考え方の違う、「阿弥陀さまのおはたらきによって自己の「いのち」の意味と方向を知ら

され見詰め直すことが出来る仏道」「在家の日暮らしのままでも真実の仏道を歩めるのだ」いや「在家の日暮らしのままでも歩める仏道こそ真実である」と

いうことを親鸞聖人はそのご生涯をかけて我々にお伝えくださったのであります。「親鸞聖人のお伝えくださった阿弥陀さまのお念仏の救いに遇わせた

たありがたさは、どんな苦しいことや、悲しいことがやって来てもその苦しいことや、悲しいことに押しつぶされることのないしなやかさと、苦しみや悲しみの中

でも阿弥陀さまのお慈悲を味わうことの出来る心の豊かさをお育ていただけるといふことではないかな」

梯實圓和上はこのようなことをお教えくださいました。何がやって来るかわからない何がやって来てもおかしくない日暮らしの中であり

ますが、何がどう変わっても決して変わらない阿弥陀さまのご本願のお念仏に包まれ護られている日暮らしを重ねさせていただくのであります。

